

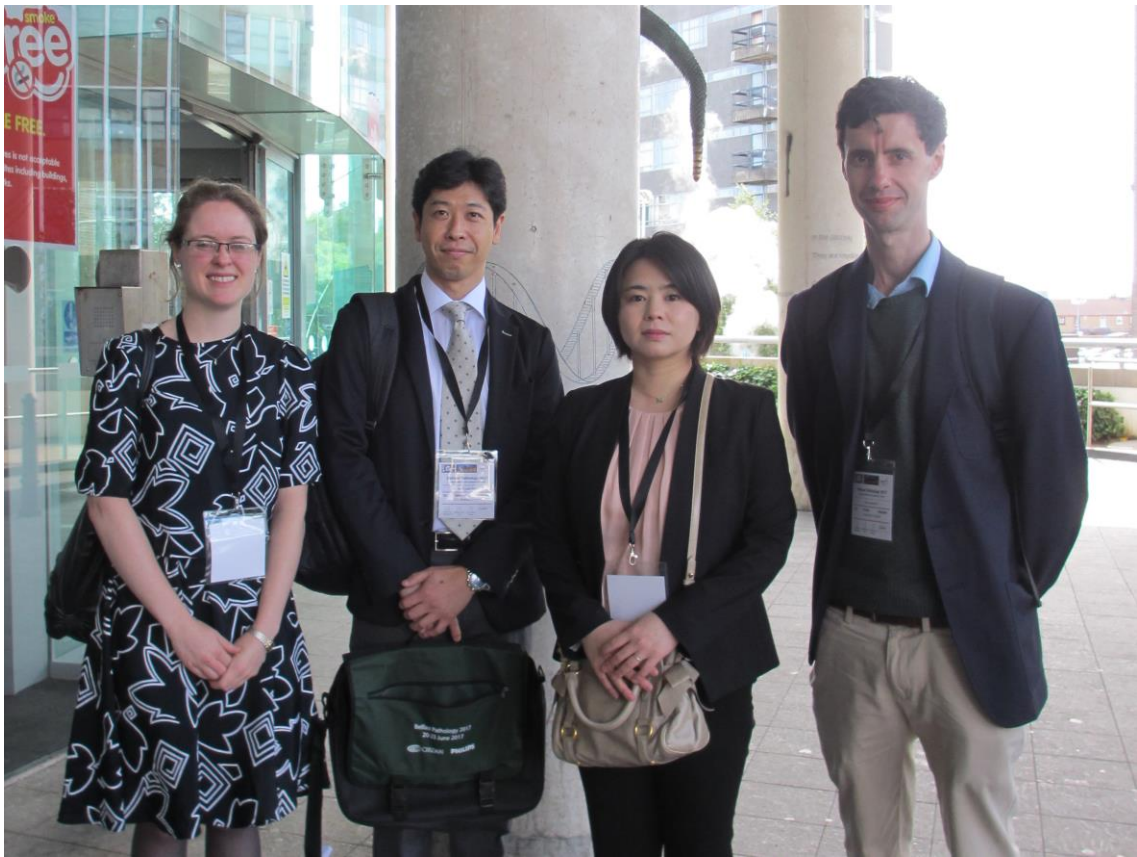
このたび日英病理学会国際交流事業の一環として、ベルファストにて開催された英国病理学会（Belfast Pathology 2017、2017年6月20～23日）に参加いたしました。ベルファストは北アイルランドに位置する都市で、タイタニック号を建造した造船所があることでも知られています。近代的な建物とともに、趣あるイギリス風の建造物の残る、落ち着いた雰囲気のある街です。

学術集会は Lagan 川沿いの Belfast Waterfront Conference Centre で行われました。集会では口演発表のセッションにおいて、研究テーマである EB ウイルス関連胃癌における microRNA 異常についての研究成果を発表する機会を頂きました。日本の病理学会総会に比べると規模が小さく、シンポジウムやポスター発表などは形態学を基礎としたテーマが多くを占めていました。会場内では様々な年代の病理医が交流し、自由に意見を交換できる和やかな雰囲気でした。また、trainee が主体となって企画・進行するプログラムが複数設けられており、病理医を目指す若手の医師が積極的に参加している点が印象的でした。

学会期間中や終了後には、ベルファストやロンドンの病院の病理部門や研究所を見学しました。ベルファストでは Royal Victoria Hospital と Queen's University Belfast の研究所である Centre for Cancer Research and Cell Biology の 2 施設、ロンドンでは The Royal London Hospital と Blizard Institute の 2 施設を案内して頂きました。それぞれが地域の基幹的な病院であり、病理部門では年間 5～6 万件の組織検体を扱っており、20 人以上（trainee を除く）の病理医が診断業務に従事しているとのことでした。同じ建物内に分子生物学的な検査を行う施設が併設され、組織学的診断と遺伝子検査を並行して行うことができる点で非常に効率的であり、診断精度の向上には欠かせないと感じました。

滞在中は trainee の Dr. Young と Dr. Macklin に大変お世話になりました。学会参加や施設見学、ベルファストで人気のレストランでのディナーまで、細やかな心遣いを頂き、心より感謝しております。英国病理学会の会長である Prof. Quirke をはじめ、セッションの座長の先生方にも激励のお言葉を頂きました。若手の先生方との交流では、研究や専門医取得に向けての準備など、色々なお話をうかがい、彼らの熱心さと勤勉さにたいへん感銘を受けました。私ももう一度初心にかえり、今後の診断業務や研究活動において一層の努力を積んでいきたいと思いを新たにいたしました。

このような素晴らしい方々との出会いや貴重な経験を与えて頂いた英国病理学会ならびに日本病理学会の関係者の皆様に心より御礼申し上げます。今後もこのような交流を通じて、両国の病理学がますます発展するようお祈りいたします。



Royal Victoria Hospital にて。左から Dr. Young、稲熊先生、牛久、Dr. Macklin。